

# マカーマートの社会批判 —パロディ・サタイヤ・アイロニー—

Social Criticism of the *Maqāmāt*  
— parody, satire, irony —

岡 崎 桂 二  
Keiji OKAZAKI

## 1. 問題の所在

バデーウッザマーン・アル＝ハマザーニー（イスラーム暦358年～398年：西暦968年～1008年）が創始し、アル＝ハリリー（イスラーム暦446年～516年：西暦1054年～1122年）が完成させたとされる「マカーマート・ジャンル」は近代（19世紀）に至るまでアラビア語散文の主流をなし、学識、文才に富む知識人（アディーブ）は好んでその実作、注釈に励んだ（Hameen=Antilla, 122 - 144）。

ハリリー作品を範とし、一人の語り手が旅先で出会った博識で雄弁な主人公の行状を語る50話（マカーマ）からなるマカーマート形式は、ハリリー以後連綿と踏襲されてきた。他方、ハマザーニー作品はハリリーの令名の下に、長く半ば忘れ去られた状態にあった。それゆえハマザーニーの『マカーマート』は今に至るも信頼に足る校訂本がないままである。（Richards, 89-99; Wenzel-Teuber, 10, fn 10）ハマザーニーの名がマカーマート作者として残ったのは、偏にハリリーが自作の序文でハマザーニーを称揚したからである。（Hariri, 3-5）

しかし、ヤージジー（1871年没）の『双海の合流点（Majma' al-Bahrayn）』と並んで、「マカーマート」の最後の傑作とみなされているムワイリヒー（1930年没）の『ハディース・イーサー・ブヌ・ヒシャーム物語（Hadith 'Īsā b. Hishām）』は、その題名にハマザーニー作品の語り手の名前を借り、明確にハマザーニーに倣った作品であることを明示した。そしてその内容はハマザーニー作品が行った社会批判を豊かに含み、ヨーロッパ諸国に侵食されたエジプト社会の混乱や腐敗ぶりを活写している。

このようにして、ムワイリヒー作品はハマザーニー作品を忘却の底から救い出し、その批判精神に改めて光が当てられるようになり、研究者の注目を浴びるようになった。一方、令名を馳せたハリリー作品は多くの垂流を生むとともに、その徒に技巧に走った文体のみが称揚され、内容は等閑視されて、ついにはグルネンバウムを筆頭とするオリエンタリストたちから、想像力に欠ける退屈な作品との批判を浴びるようになった（Abu Haidar, 76）。

このハマザーニーとハリリーの評価に関する逆転現象の主因は、ハマザーニー作品が含むユーモアと社会批判にある。本稿はハマザーニーの『マカーマート』を対象にして、この作品が生み出す笑いの原因を、パロディ、サタイヤ、アイロニーの面から探りたい。

マカーマート研究はBeestonを濫觴とし、以後Kilito, Goodman, Malti-Douglas, Zakhariaらが活発にテキスト分析を行い、Hämeen-Anttilaがマカーマート研究の現段階を示す著作を著した。

マカーマート研究において、パロディ、サタイヤ、アイロニーを核語にして内容分析した嘲笑はMonroeであったが、『マカーマート』が含む社会批判の観点からテキスト分析する本稿とはその目的を異にしている。(Monroe, 6-9)

そして『マカーマート』の社会研究はWenzel-Teuberが行っているが、その副題「イスラーム暦4世紀のイスラーム社会の鏡として」が示すように、テキスト研究よりも、そこで描かれている社会状況の説明に重点が置かれている。

また本稿では、ハマザーニーの作品世界は価値逆転、価値観転倒のカーニバル世界であることを明らかにしたい。この解釈において、『ドン・キホーテ』や『ガルガンチュア物語』が描く世界は、一切の常識や規則、価値観が逆転するカーニバル世界だとの斬新な説を出した、ロシア・フォルマリズトのバフチンの理論を援用する(北岡)。

## 2. ジャンルとしての「マカーマート」

今に至るもアラブ文学の主流は詩であり、中東各地ではナドワと称される集会において、詩の朗読が行われ、テレビにおいても詩の詠唱番組は人気を保っている。他方、ジャーヒリーヤ(プレ・イスラーム期)以来、連綿と続く詩作に比して、散文文学の誕生は遅く、ジャーヒズ(890年没)の登場を待たざるをえなかった。

アラビア語散文はイスラーム勃興後(7世紀)、統治の必要により書記官僚(カーティブ)が起草した外交文書や官庁文書、『コーラン』を誤りなく理解するために文法学、法学、に関して学者(アーリム)が物した著作に用いられた。それゆえ、韻文に比して散文著作には真実性が要求され、散文を用いてイマジネーションを自由に発揮したフィクショナルな作品には忌避感が持たれていた。またアラビア語散文は文人(アディーブ)が自己の意見や所感を記す「書簡論文(リサーラ)」、さらには「アダブ物」と称される「逸話集」において用いられたが、これらは何れもフィクショナルな文学作品ではない。

このような想像力に基づく文学作品に対する忌避感が横溢する文学環境下、ハマザーニーは作品冒頭に「ハディース」に倣うイスナード(伝承径路)を付すことで、この隘路を切り抜けるとともに、作品中で自由に想像力を発揮できるようになったのである。そしてイスナードに続く文で開陳される逸話は、神聖なる「ハディース」と全く異なる悪の行状、犯罪行為の羅列である。主にムハンマドの言行を記録した「ハディース」は、全てのムスリムの行動規範であり、遵守すべき規則である。

さらにハマザーニーの『マカーマート』は詩の挿入と、サジュウと称される押韻と対句を用いる華麗な散文であるが、その文体で描き出すのは詐欺、盗難等の犯罪行為であり、ここにも高級(ハイブラウ)な文体と低俗な叙述内容に乖離がある。

これらのハマザーニー作品の形式(イスナード)と内容(マトン)の落差、文体と叙述内容の齟齬は、作品中に笑いを生み出す主因となっている。

さらにハマザーニーが語り手に選んだイーサー・ブヌ・ヒシャームという名前は、イーサー、

ヒシャームとともにアラブ・イスラーム世界では、ザイドやウマルとともにありふれた名前であり、その無名性と並んで、「どこにでもいる人」であるとともに、「どこの誰でもない人 (Mr. Nobody)」を暗示させる。またイスナードが一人だけのハディースは大いに信憑性に欠ける。つまりハマザーニーは各マカーマ冒頭で、「これから始まるのは、名無しの権兵衛が語る与太話だ」と聖なる形式を援用して宣言しているのである (Hämeen – Anttila, 35 -40)。

このようにハマザーニーは「ハディース形式」を援用することにより、巧みに散文への忌避感を回避し、フィクションへの道を開けるとともに、形式や文体と内容の落差、語り手と語る内容の齟齬、乖離によって、自ずと笑いを生み出すことに成功したのである。

またハマザーニーの『マカーマート』は叙述形式として、語り手と主人公に関し、以下のような円環構造を持つ (Kilito, 67; Monroe, 33)。

両者の邂逅→学識披露 (雄弁) →褒章→**正体暴露**→叱責→弁明 (雄弁) →別離

またこの円環構造は正体暴露をはさんで鏡像関係をも構成している。さらに共に旅する語り手 (イーサー) と主人公 (イスカンダリー) は、この邂逅と別離とを繰り返す循環構造をも形成している。

この整然とした円環、鏡像、循環構造は、ハリリー作品では全50話 (マカーマ) において貫徹されている。しかし逆に首尾一貫して同一の形式、構造を繰り返しているところから、ハリリー作品はそのアラビア語散文の粋を凝らした華麗な文体にのみ注目され、内容は単調で退屈だとの評価が与えられている。

一方、ハマザーニー作品ではこれらの形式、構造に従わないマカーマがある。それらは、①主人公が登場しない、あるいは通常の主人公イスカンダリー以外が主人公、②語り手が主人公、に大別されるが、ハマザーニー作品解釈の鍵は、これらの基本構造から外れたマカーマの分析にあると思われる。つまり、作者がわざわざ基本形式、構造に従わないマカーマを挿入したことは、そこに何らかの作者の著述意図が込められていると考えられるからである。

①の主人公が登場しない、あるいはイスカンダリー以外が主人公のマカーマは、さらに (ア) 新興商人が主人公 (サイマラ、マディーラ) と、(イ) スイーラに倣うマカーマ (獅子、ビシュル) に分けられ、また②の語り手イーサーが主人公のマカーマは、(ハ) 騙し役と、(ニ) 被害者、に分けることができる。(分析は後述)

また叙述内容においてもハマザーニー作品とハリリー作品は大きく異なっている。一般的に「マカーマート」は悪漢小説、ピカロ小説だとの評価が下されることが多いが、このレッテルはハマザーニー作品には該当するが、ハリリー作品には当てはまらない。つまり、前者においては、語り手、主人公ともに甘言で人を騙し、純朴な田舎者を愚弄し、さらには無銭飲食という下賤な犯行にも及ぶという多彩なテーマが扱われて変化に富み、読者 (聴衆) の予想を裏切る。また、イスカンダリーが被害者になり、語り手が犯罪行為に手を染める。このような変化もまたハマザーニー作品とスペイン・ピカロ小説と通底する要素となっている。

他方、ハリリー作品においては、主人公アブー・ザイドは常に万学の士として描かれ、文

学、語学、法学は言うに及ばず、時には産科学、占星術の知識をも開陳する。またそれらの学識を基に雄弁を揮い、流麗な詩文を披露して聴衆を感嘆させる。それゆえ、アブー・ザイドが受け取る報酬は、貴人の賞賛詩により報酬を受ける詩人と同じく、その学識、雄弁さを備えた人物（アディーブ）に対する当然の報酬であり、ハマザーニー作品のような詐欺、犯罪行為による不当な稼ぎではなく、悪漢小説とのレッテルは相応しくない。この両者の叙述内容の相違、一貫した人物像の描写も、またハリリー作品の単調さという作品評価に結びつく。

またハマザーニーは多彩な場面、事件、人物を描くことで、10世紀末の混乱したアラブ・イスラーム社会の実態をあぶり出し、転換期の時代相を明らかにし、学問が軽視され、金力に勝れた新興商人が闊歩する社会を批判する。

ハマザーニーが生きた時代はアッバース朝が崩壊の危機に瀕し、ブワイフ朝、ファーティマ朝、イドリース朝と各地に地方政権が叢生した。この転換期に、社会は混乱し、旧来の価値観が崩壊した。ハマザーニーはその混乱期の社会の実相を描き、特に下層民の生活を描き、新しく力を持つようになった人々を批判した。

以下にハマザーニーがどのように作品中で社会批判を行っているのかを、パロディ、サタイヤ、アイロニーをキーワードにして分析する。

### 3-1 パロディ

パフチンの先駆的な研究以来、パロディは文学研究の中心的なテーマとなるとともに、ポスト・モダン主義の本質論争の中心点でもある。(Dentith, IX) 文学作品におけるパロディは他人のこぼれや表現の模倣 (imitation)、あるいは変形 (transformation) と一応定義付けられるが、パロディを生み出す行為は自身の言葉の引用をも含む「間テクスト性 (intertextuality)」とも関連する。(Dentith, 5-6)

このように広い範囲で議論されているパロディであるが、ハマザーニーの『マカーマート』は多彩なパロディ技法が用いられている。もっとも顕著で明示的なパロディは、ムスリムにとって神聖なテキストであるハディースの模倣である。

先述のように、各マカーマ（逸話）は冒頭にハディースに倣うイスナードを置く。しかしハディースにおいて内容（マトン）とともに重視される伝承過程（イスナード）を支える人物が全く無名の存在であり、しかもシーア派のハディースを除いて、通常複数であるべきイスナードに、その実在の疑わしい人物一人しか記されていない。それゆえこの「どこの誰でもあり、どこの誰でもない」無名氏（イーサー・ブヌ・ヒシャム）が支えるハディースは全く信憑性が欠けている。このようにして、ハマザーニーは神聖であるべきハディースをパロディ化することで、自作がフィクションであることを冒頭で明示するとともに、ムスリムの行動規範を伝えるハディースと犯罪行為の記録という、語られる内容の落差、叙述の対比を通して、真面目な文章を笑い飛ばす批判精神を発揮する。

マカーマ（立つこと、立っているもの）はマジユリス（集会、原意は座ること、座る場）と対比をなす語であり、強く説教を示唆する。アラブの楽しみである夜話 (samā') や文人 (adīb) の集会は座りこんでの歓談の場であるが、宗教に関わる説教師 (qāṣṣ, khaṭīb) は立って教える

説くのが慣例である。このような説教との密接な関係を示す語を表題とする『マカーマート』には、説教をテーマとするマカーマがある（10、11、26、39、49）。

何れのマカーマも、粗衣を纏った人物が雄弁さを発揮して、贅沢を諷め、来世に備えよと説く（第10話）。あるいは遊興に耽る人々の前に突然棺桶を抱えて登場し、瞬時に遊蕩気分を覚ます（第11話）。しかし各マカーマでは、説教師は悪漢イスカンダリーであり、説教の目的は人々から口先巧みに金を巻き上げることにある。ここにも説教をパロディ化し、語る人物と語られる内容が乖離し、その落差の大きさが笑いにつながる。ハマザーニーは大胆にもハディース、説教、という神聖なテキストをパロディ化し、低俗な内容を盛り込んで笑いを生み出そうとする。

さらにジャーヒリーヤ期の英雄譚であるスィーラに倣う第6話「獅子のマカーマ(asadiyya)」、第51話「ビシュルのマカーマ」において、アラブの誇る英雄伝説をパロディ化している（Goodman, 28; Hämeen-Anttila, 101）。『アンタル物語』やカスィーダで開陳される、勇気、忍耐、寛大さという砂漠の遊牧民のエトスをこの両マカーマは換骨奪胎することで笑いの対象としている。

「獅子のマカーマ」はジャーヒズ、イブン・アブドゥッ・ラーヒ、スユーティー、さらにアッターイーらがそれぞれ物した「獅子の描写」を下敷きにしており、これはさらにアラブ古典文学の事物を表裏二面から論ずる「マハーシン・ワ・マサーウィー」という形式に倣っている（Hämeen-Anttila, 102; Wang, 82; 岡崎一2009、参照）。ライオンの獰猛さを克明に描写した後で、隊商一行がこの猛獣と対峙するさまを描く。そしてライオンにより仲間を一人失った旅人達は砂漠中で弓矢を携えた若者に遭遇する。この若者は残忍にも隊商の一人の胸を射抜き、残余の者たちを互いに手を縛らせる。しかし、若者がイーサーの所に来た時に、イーサーはブーツ内に隠し持ったナイフで相手を一刺しして殺害する。この無害の人間がライオンに殺され、同行者が若者に殺される血腥い事件の連続は、イーサーによる若者の殺害によって頂点に達する。ジャーヒリーヤ以来の「砂漠の英雄譚」を模しながらも、内実は残酷なシーンの連続となり、読者（聴衆）の期待は裏切られる。

この読者（聴衆）の失望感、最後の脈絡もなしにイスカンダリーが登場して人々に物乞いし始めるシーンで最大になる。つまり、英雄譚を卑賤なテーマで終わらせることで、英雄譚をパロディ化して、マカーマ全体を笑いに転化している。

「ビシュルのマカーマ」は時空間が錯綜している。主人公のビシュルは武勇に勝れ、他部族への襲撃を繰り返している。娘を結婚相手に差し出せと迫られたハザーラ族の族長は、その無法ぶりに恐れをなし、遂に法外な条件を課すことで難を逃れようとする。しかし豪胆なビシュルは獅子を血祭りにあげ、大蛇を屠して課された条件を果たす。

このようにして自己の武勇を通して結婚の条件を満たしたビシュルは、意気揚々と娘を貰い受けに叔父の所に向かう。途中、砂漠で一人の若者と遭遇し、この若者は突然ビシュルに戦いを挑む。刃を交わす前に、身分を明かすように求めると、なんとこの若者は別れた妻の子供、つまり、ビシュルの息子だと名乗る。この親子の対決という古くからオリエント世界で語られているテーマを「ビシュルのマカーマ」は取り入れている。

しかしこのマカーマでは時間進行に破綻があり、別れた妻との間の子供が若武者に成長するまでには、少なくとも15年か20年かかるであろう。それが獅子と大蛇を退治している間に成人になっている。

また豪胆な父親はあっけなく息子に打ち負かされ、その姿には獅子と大蛇を退治した英雄のイメージは微塵もない。ここにも武勇に優れた荒くれ者が、武闘経験乏しい若者に倒されるという矛盾がある。

このようにハマザーニーの『マカーマート』は、ハディース、スィーラをパロディ化することにより、神聖な形式を世俗化し、崇められるべき英雄を下賤で惨めな状態におく。この価値転換の世界はバフチンの説くカーニバル世界であり、カーニバル世界を通して、社会や時代が変わり、倫理や価値観が変わったことを明らかにする。

### 3-2 サタイヤ

ポラードは「風刺 (satire) は愚行の摘発と悪徳の懲罰という二定点をその空間の焦点として楕円形の軌道を描く」と風刺詩の要約を行い (ポラード、6)、ギルハメットは「サタイヤは一種の詩であり、人間の悪徳、無知、誤謬が露わにされて、(読者の) 心を浄化する (purge)」と述べる。(Guilhamet, 2)

確かに『マカーマート』における作者の新興商人に対する風刺、嘲笑、揶揄、非難、は激しく、また無知な者や偽善者、見せかけの信心家に関して攻撃の手を緩めない。第42話「サイマラのマカーマ」では、主人公の成金商人は一代で成した財産を積んでユーフラテス河を運行する船に乗りこむ。そして乗船後直ちに相乗り客を歓待し始める。船客は大喜びし饗応に應えて蕩尽する。そのため積んでいた食材は全て食べ尽くされ、ために船は傾き、遂には難破する。船客一同の非難は饗応主の商人に集まり、さんざん打擲される。商人は恨みを晴らすべく、旅に出、刻苦精励して再び財を成す。

商人は人々の称賛を集め、注目を浴びるためにバクダードに向かう。首都につく前に既に商人の噂は町に広がっており、人々はその到着を待ちわびる。到着するや、商人は期待通りの大盤振る舞いに及び、たちまち蓄えた財産も底をつく。すると人々の足は屋敷から遠のき、町で出会っても無視される有様となる。商人は前回の失敗からいかなる教訓をも学んでいないのである。おまけにこの商人は商用で各地を巡る間に、綺語や俚諺、珍しい表現を収集する「知識を求める旅 (ṭalab al-'ilm)」をしている文人 (アディーブ) として描かれている。学識を備え、それに相応しい行動をすべき人間の常識を失くした姿をハマザーニーは戯画化する。外面と内面の乖離を嘲笑する。

しかしこの経験に学ばぬ商人は、客たちの忘恩に復讐するために、再度旅に出、刻苦精励して富を築くとともに、知識をも修得する。

再度富を積んでバクダードに戻った商人宅に、以前と同じく人々は押しかけ、饗応に応じる。商人は食べ疲れ、飲み飽きて寝こんだ人々の髭を、かねて屋敷に呼び込んでおいた理髪師に剃り落とさせる。目が覚め、男らしさ、権威の象徴たる髭がないことに気付いた人々は、一か月間蟄居したのち、商人の行為を領主に訴えかける。しかし領主は商人の行為を正当と見なし、

褒美をも下す。

さて読者（聴衆）は過ちに学ばず、再度同じ失敗を繰り返した商人に、共感を寄せ、感情移入ができるであろうか。また饗応に応じた人々はいかなる罪、過ちを犯したのでであろうか。さらに領主の判断は正しかったのでであろうか。

「サイマラのマカーマ」で描かれている世界は価値逆転のカーニバル社会である。バフチンが述べるように、カーニバル時には、乞食が王になり、愚者が賢者にとって代わる。全てが過剰になり、宴会で蕩尽が繰り返される（北岡：298～305）。

この成金商人の目的は、財力で人々の称賛を浴び、注目を集めることの一点にある。この価値観は、目立つことなく中庸を勧め、礼節の遵守を説くイスラームの教えから完全に逸脱している。また復讐を禁ずる教えに逆らって、逆に商人に褒美を与えた領主も慣習法に違反している。

他方、商人を非難し、髭を剃られた人々はいかなる罪を犯したのでであろうか。寛大を最大の行動規範とするアラブ社会において、招待客は饗応に応じるや、最大限消費して主人への感謝とするのが客としての義務である。その当然の義務を果たした者の名誉が損なわれる。まさに価値が逆転したカーニバル世界であり、惜しげもなく出される料理の過剰さとともにカーニバルの特徴となっている。

さらにハマザーニーは「マディーラのマカーマ」において、新興商人の思考、行動が常軌を逸している様を活写する。

他に並ぶ者なき雄弁と博識の持ち主イスカンダリーは、語り手イーサーが同席する宴席で天下の珍品とされるマディーラが出されるや、この最高のご馳走を呪い、マディーラが下げられるまでは一切口を利かないと話し出す。困惑した同席者は彼の意見を聞き入れ、人々の恨めし気な目の中を下げられてしまう。人々はイスカンダリーのマディーラを忌避する理由をと言いただすと、「私の話は長くなるが、それでもよいか」と念を向けたうえで、話し始める。

イスカンダリーはバグダードである商人にマディーラをご馳走しようと誘われる。正体に応じるや商人は、自宅の立地が貴人が住む一等地にあり、屋根は～、門は～、ドアノッカーは～と自宅の自慢を始める。はては妻の自慢を始め、深窓の奥におるべき豪商の妻が、働き者で、台所で働き、おかげで顔は真っ黒だと話す。

イスカンダリーはここで男の思考が尋常ではないことに気付くべきだったのだ。厳しい男女隔離の慣習、イスラームの倫理の下、見ず知らずの者に自分の妻のことを話題にすることの無作法さ。おまけに、豪商の妻の顔が煤で真っ黒という打ち明け話の非常識さ。ジャーヒリーヤの時代から、美女の条件は満月のような顔に皓齒、目はアーモンド状とされてきた。

読者（聴衆）の反応はいかがであろう。賢明で常識ある者はこの商人の異常さにいち早く気付くであろう。そして、博識なイスカンダリーが食欲に負けて相手の饒舌さを我慢し、自己の雄弁さのお株を商人に奪われた役割逆転に、以後の話の展開、進行を予測できず、サスペンスを感じるであろう。イスカンダリーはマディーラを食べることができるのか。いつイスカンダリーは機知と雄弁を発揮するのかと。

イスカンダリーが沈黙する中、商人は食卓に並べられた食器、手洗い盆、ナプキンとさらに

自慢話を続ける。やがて商人はトイレ自慢に至り、拙宅のトイレのタイルはピカピカに磨きあげられ、アリも滑り落ちる程であり、そこで十分食事できると言う。ここに至ってイスカンダリーは商人の思考が異常であり、長居は無用とばかり屋敷を後にする。後を追ってきた商人は屋敷前で、「アブー・ファトフ殿、(まだ) マディーラ (が出ていません) Abū al-Fath al-Madira」と大声で呼び戻す。その声を聞きつけた子供たちはマディーラをアブー・ファトフのクンヤと誤解し、声をそろえて「アブー・ファトフ・アル＝マディーラさん」と呼びかける。その声に、イスカンダリーはいつまでもマディーラが追いかけてくると、怯えて石を投げると運悪く一人の子供に当たり死なせてしまい、逮捕され、2年間も投獄される。ここではコトバの線状性が巧みに利用されている。「アブー・ファトフ・アル＝マディーラ」という一連の語句は時間軸に沿って理解され、その流れを逆転させることはできない (Hämeen Anttila, 113; 岡崎-2002: 155)。

イスカンダリーはマディーラに関し、こんな散々な目に遭ったと経験談を話し、一同を納得させる。

このマカーマを読み(聞き)終わった読者(聴衆)はいかなる読後感を得るだろうか。まことにイスカンダリーは商人に酷い目に合わされたものだ、と納得するだろうか。著者はイスカンダリーが雄弁の武器を相手に取られた、役割逆転の姿を描いたのだろうか。この「マカーマ」は、困惑するイスカンダリーのコミカルな姿を描き出すのを目的にしたのだろうか。

しかし、語り手は犯罪常習者のイスカンダリーであり、口先で相手を騙す詐欺漢である。信用できない話し手の語る話は信用できない。イスカンダリーが商人との一件をでっちあげていたとしたら、このマカーマの解釈はどうなるであろうか。

真相はイスカンダリーは架空の被害話を作り上げることによって、人々から天下の珍肴を食する機会を「奪った」のである。もちろんこの作り話により自身もマディーラを食する機会を失ったのであるが、自己の犠牲を厭わないイスカンダリーの豪胆な性向は第23話「護符のマカーマ (al-Hizliyya)」で示されている。嵐に翻弄される船の客たちは、一人端然と坐するイスカンダリーに驚嘆し、その嵐をも恐れぬ豪胆ぶりを羨み、その訳を訊ねる。それに答えてイスカンダリーは、「わしは海難除けの靈験あらたかな護符を所有している。何ならお分けしようか」と誘うと、乗船客は先を争って求める。「料金は1ディナールだが、無事目的地に着けばさらにもう1枚を頂く」。護符の効果か、船が無事目的地に着くや人々は感謝しつつ残余の金を払う。その光景を見たイーサーが大胆な行為の意図を聞くと、「船が沈めばそれまで。無事着けばもうけもの」と自己の命を賭した策略を語った。

このような豪胆なイスカンダリーは招待客に一泡吹かすために、自己の食欲を犠牲にして作り話を語ったものと考えられる。そして、マディーラを味わうチャンスを失った代わりに、イスカンダリーは何を得たのだろうか。その策略と話芸の報酬は何か。イスカンダリーは、満座の客を支配する快感を得たのである。己の機知と大胆な行為で一座のものから天下の珍品を食する機会を奪ったのである。人々を操るという無形の報酬を得て満足したのである。(Hämeen-Anttila, 110)

このイスカンダリーの機知、実行力は、商人の自慢話の前に沈黙を守る忍耐力と対をなし、

遂には商人の言葉は空しく、ただ過剰さのみが前景に出る。

新興商人の思考が通常の常識とは逆転していることは、第41話「遺言のマカーマ(al-Wasiyya)」が明らかにしている。このマカーマでは老境に入ったアブー・ファトゥフが商売を息子に継がせるべく、その要諦を遺言として教え諭す。彼は「昼は断食、夜は睡眠を心がける」ようにと説き、財産を食い尽くす最大の源は寛大さと食欲であり、商人として「ウソも方便だ」だと言いつくす。

商人(イスカンダリー)はこのようにアラブ・イスラーム文化における最大の徳目である「寛大さ」、「誠実さ」を否定し、人間の根源的欲望である食欲を非難する。食事はワジャバート(1日1食)とし、パンと塩を主として酢と玉ねぎは主人の許可制とせよと厳命する。この通常の倫理に背く生き方をハマザーニーは激しい非難を秘めながらもコミカルに描きだす。

またハマザーニーは庶民の愚かさ、見せかけの信心を手酷く攻撃する。そこでは食がテーマとされ、語り手イーサーが加害者と被害者の両様を演じる。

第12話「バグダード(アズド)のマカーマ」では、旅先でイーサーが一人のお上りさんに「やあ、アブー・ザイドじゃないか。父上はご健在か」と呼びかける。相手は「おらあ、アブー・ザイドなんかじゃなく、アブー・ウバイドじゃあ」と返事をし、人違いだと言い張るが、イーサーの執拗な繰り返しに根負けして、ご馳走するとの誘いに応じて飲食店に同道する。自己のアイデンティティを失った田舎者は、もはや記号論的に食欲の象徴と化している。

そしてイーサーが用いたアブー・ザイドのザイドは、アラビア語文法書等において、アラブ人の代表的な名前として例文等に用いられる固有名詞であり、日本語における太郎や一郎、花子と同じ機能を果たす。この意味において、ハリリーが自作の主人公にこの名を援用したのも、その汎用性、無名性を利用したからである。つまり、ハマザーニー作品の語り手イーサー・ブヌ・ヒシャーム同様「誰でもありうるが、誰でもない」人物、すなわちアラブ人一般の表徴として利用したのである。(Hämnen-Anttila, 155)

田舎者はこのザイドという固有名詞のもつ機能の前に自己を失い、食欲に負けてしまったのである。そして、食事中に密かに店を抜け出したイーサーが事の成り行きを見守るうちに、被害者は店主より代金を請求され、泣く泣く支払う羽目に陥る。この「バグダードのマカーマ」は作者が言葉の機能を巧みに利用して、無知な人物、貪欲な人間を皮肉な小品となっており、コトバの線状性を利用した「マディーラのマカーマ」と通底する叙述技法が使われている。

また21話「モースルのマカーマ」は村人の無知と上辺の信仰心の浅はかさを描く。イーサーとイスカンダリーは腹を空かせてモースルの町に辿り着き、ある家で葬儀の準備が忙しく行われているのに遭遇する。忽ち悪漢のイスカンダリーは「さて、どんな策(ヒーラ)を弄するか」と舌なめずりせんばかり勢いである。二人が喪家に入るなり、イスカンダリーは死人の脈を取り、触診して、この者は仮死状態であり、わしが3日のうちに蘇生させると宣言する。仮死の証拠に脇下を触ればまだ暖かいと言い、村人に脇下を触らさせる。アブドゥフの刊本では脇(ibt)となっているが尻穴(ist)となっている写本もある。いずれにせよグロテスクな光景が繰り返され、庶民の知恵の浅はかさを浮き彫りにする。一体に酷暑の中東地域では、腐敗を恐れて、死後速やかに埋葬するしきたりが守られている。暑く蚊の名所で知られているモース

ルでは一刻も早く埋葬すべきなのに、3日も延期させる。このマカーマではカーニバルの特徴の一つであるスカトロロジーが横溢している。カーニバルの宴会の後は、当然、蕩尽した飲食物の事後処理を必要とする。またこれはピカピカに磨き上げた拙宅のトイレでは飲食も可能だと発言する「マディーラのマカーマ」と通底する描写である。(Wang, 77)

念の入ったことに、イスカンダリーは死者が蘇生の声をあげても応答してはならぬと厳命して、死者を一人部屋に寝かせたままにし、その間に贈答品を受け、盛大な接待を受ける。しかし当然のことながら蘇生させることはできず、村人に詰め寄られたイスカンダリーは、死者を立ててみれば真相が分かると説き、村人に死者を立てせさせる。この言葉をも信じた村人は再度グロテスクな行為に及ぶ。嘘がばれたイーサーとイスカンダリーは散々に打擲された後、村から逃げ出す。

ついで辿り着いた村は洪水に襲われて難儀をしているところであった。前回の失敗にも懲りず、イスカンダリーはまたも村人に、自分は洪水を治める祈りを知っていると豪語し、その儀式に必要な処女と黄色の牛を差し出すようにと要求する。簡単に見ず知らずの人間の虚言を信じた村人は、先の村人同様に要求の牛と乙女を差し出し、贈答品をも差し出す。獲物を手にした二人は、村人を集め、これから祈祷をおこなうので、自分の所作を嚴重に真似るようにと告げ、イスカンダリーは平伏して長い祈りに入る。村人も言われた通りに下を向き平伏する。イスカンダリーは居眠りをしているのかと訝られる程に座礼を続け、村人も半信半疑でそれに倣う。村人の行動を見届けた二人は、そのまま一目散に村を後にする。主従は前回の失敗を回復してもなお余ほどの収穫を手にしていた。

この「モースルのマカーマ」で描き出されているのは、イスカンダリーの機知と巧みな弁舌、それと対称的な疑うことを知らない村人の純朴さ、軽薄さである。かれらの軽はずみな行動は読者（聴衆）の軽侮を招き、改めて村人の無知への笑いを誘う。

また同じ行為が失敗、成功する二面性をも表している。笑いに包んだ作者の非難は鋭い。

軽信さや見せかけの信仰への非難は第10話「イスファハンのマカーマ」と第49話「葡萄酒のマカーマ」においてもテーマとされている。何れも語り手イーサーがその見せかけの信仰心を攻撃され、軽挙妄動を揶揄される。

「イスファハンのマカーマ」では、キャラバンに加わり出立の間際に朝の祈りの時間となった。そこでイーサーは旅の一行と別れることを心配しながらも寺院に行く。当時道中の安全を確保するために、旅は必ず団体を組む慣習があったが、同じ目的地に向かうキャラバンを見つけるのは運次第であり、一旦チャンスを逃すと次回は何時になるかは運任せであった。

そんな事情があるので、イーサーは後ろ髪を引かれながらも、信仰を優先させて一行と離れて一人寺院に向かう。イマームはコーラン朗誦学派でもっとも時間のかかるハンバリー派の属する者で、礼拝が始まるや、長々と朗誦し、一行の旅立ちを案づるイーサーをやきもきさせる。

かくしてイーサーはふとした心の緩み、見せかけの信仰心の発露により、散々な目に合う。

同様の心理戦は第49話「葡萄酒のマカーマ (al-Khamriyya)」でも繰り広げられ、一晚飲み明かした一団は、別の酒屋に向かうところで夜明けの礼拝の時刻を迎えた。一行は泥酔で酒の匂いを振りまきながら寺院に入っていった。途端にイマームはその匂いを感知し、「この中にイ

スラムの教えに逆らう不埒な者がいる」と一声発して礼拝を始める。一行は礼拝集団の中で顔を上げることも、酒臭い息を吐きだすこともできない。その連中の苦しみを増幅させるがごとく、イマームの説教はいつになく長い。ほうほうの態で寺院を出たイーサーが酒屋に辿り着くや、先客はイマームに扮していた悪漢イスカンダリーであった。

イーサーたちは酔っぱらったまま礼拝に参加する軽はずみな行為の結果、イスカンダリーの罠に掛かり、悲惨な結果となったのである。このイーサーの行動を通して作者は見せかけの信仰の愚かさを描く。

アラビア語派生形第5形 (tafa'ala) は「～のふりをする」意味を表す。それゆえ「mutaṭṭabib」は「偽医者」、「ta'addaba」は「文人気取り」を表す。作者はこのアラビア語の特性を基に、「偽信仰」を笑いの中で諷める。

『マカーマート』中には説教をテーマとするマカーマがある。

第11話「アフワーズのマカーマ」では遊興客の前にイスカンダリーが棺桶を担いで登場し、人々の気持ちを一気に冷ます。しかし彼の熱弁は結局人々から金品を巻き上げることにあったように、他の説教をテーマとするマカーマも、その説教は金目当てであって、真率な信仰心から出たものではない。

説教をテーマとする「マカーマ」においても、みすぼらしい外見と雄弁という内実、もっともらしい説教内容と物乞いという目的、という内面と外見の乖離がおきており、その落差は皮肉を招き、非難を生み出す。

「気取りと偽善はいつの時代にあっても、風刺家の格好の題材となって」おり、「聖職者や、自ら信心家などと豪語する人間がことごとく風刺家の関心を引き付け、たえずその題材となってきた」が、「かれらは〈贖罪のヤギとして〉『好色な俗人』の身代わりの役を演じ」ることとなるのだ。ハマザーニーの『マカーマート』では見せかけや、見栄ゆえの信仰心が痛烈に非難され、嘲笑されている。(Goodman, 31; ポラード、18～19)

### 3-5 アイロニー

一般にアイロニーとは「反語表現」とみなされている。不味い料理を食べた客が「こんなに旨いものは食べたことがない」と言えば、自ずと嫌味が醸し出されるだろう。また、通常、「太い足だね」とストレートに事実を述べるより、「本当に折れそうな位の細い足だね」といえば、より無礼で、与えるダメージも強いだろう。このように反語的な言語表現、つまり字面や文面とは反対の意味を表す「言語アイロニー (verbal irony)」には、ユーモア、嫌味、滑稽感を持つことがある。(内海、99～100；辻、92～93；ミカ、2、10、14)

この言表としての反語表現以外に、アイロニーには状況が関与する「状況アイロニー (situational irony)」がある。(内海、100；ミカ、14) その典型が「策士、策に溺れる」、あるいは「ミイラ取りがミイラになる」という状況である。知恵者と自他ともに認める人物が、他ならぬその知恵で打ち負かされると、落とし穴に落ちた人間を目撃したのと同様に、憐憫とともに、嘲笑を催させる。特に、その落とし穴を掘った人物が、その事実を忘れて穴に落ち込むと、アイロニーは増幅され、憐憫、嘲笑は倍加される。

そしてこの言語アイロニーと状況アイロニーの共通要素として、ミカが挙げる「外観と実体の対比」が指摘できる。(ミカ、16) さらに劇や戯曲における「劇的アイロニー」の存在も指摘できる。(喜志、33～35；ミカ、19、40) この「外観と実体の対比」と、登場人物が知らないことを観客、あるいは読者が知っているという「劇的アイロニー」の2要素が「マカーマート」には込められている。みすばらしい風体の人物が雄弁と博識を披露して知識人（アディーブ）から金を巻き上げる。あるいは語り手が旅先で遭遇する人物は決まって悪漢イスカンダリーなのに、毎回その人物の正体に気づかずに騙され、カモにされる語り手の姿。

ハマザーニーの『マカーマート』には、この「策士、策に溺れる」テーマ、すなわち「状況のアイロニー」、を扱ったマカーマがある。前述の「マディーラのマカーマ」が典型だが、雄弁家のイスカンダリーが口達者な商人にお株を奪われて沈黙を守る。その姿は不条理劇における黒い笑いを誘い、日ごろの悪事の報いだと読者（聴衆）の溜飲を下げさせる。ポラードは風刺（サタイヤ）とアイロニーを比較して、アイロニーは風刺より重々しく、その重々しきで残忍かつ陰惨な色彩を帯びるとする。(ポラード、7)

そして、異例にもこの「マディーラのマカーマ」では、冒頭で、イスカンダリー師は博識で雄弁家だと紹介されており、その人物が商人の博識と雄弁に圧倒され、はては投獄の憂き目に会う。テーマとしてはアラブ古典文学でよく取り上げられるものであるが、策を弄して職にありつこうとするトゥハイリー（押しかけ食客）とそうはさせじとするバヒール（けちん坊）の攻防である。しかし、「マディーラのマカーマ」はトゥハイリーを策略家ではなく雄弁家として設定しているのが斬新である。そして、バヒールたる商人が洪水のようにあらゆる事物自慢を繰り広げ、雄弁家イスカンダリーに一言も口を挟ませない、この役割逆転がアイロニーとなり、読者（聴衆）の憐憫と嘲笑を招く。

第36話「アルメリアのマカーマ」は腹を空かせたイーサーとイスカンダリーがとある村のパン焼き屋に辿り着く場面で始まる。好機到来とばかりにイスカンダリーは主人に、寒さに震えているのでパン焼き竈（タンヌール）で体を温めさせて欲しいと懇願する。同情した主が承知すると、イスカンダリーは竈の上に座り込むや、懐の塩を竈に振りまき、大きな音を出す。音に驚いた主人が竈を見ると虱状の白いものを目にし、逆上して、虱のついたパンは売り物にならないからと、イーサー達に渡す。かくしてイスカンダリーの機知と犯行の大胆さによって二人は食にありつく。

パンの後は飲み物だと、一行が牛乳売りの所に行くと、イスカンダリーは「ちょっと味目をさせてくれ」と言うや、牛乳瓶の中に手を突っ込み、まるで探し物をするかのように、中を掻き回した。驚いた主人に対してイスカンダリーは「お礼に刺絡（ハジャム）でも」と申し出る。一行が下賤な刺絡師だと思った牛乳屋は、穢れた刺絡師が手を突っ込んだ牛乳は売り物にならないからと、瓶ごとイスカンダリーに渡す。

奇策により、まんまと空腹を満たし、飢えを癒えさせた二人は、またも牛乳鉢を持った少年に出会い、パンと牛乳を所望する。すると少年は、パンは有料だが、牛乳は只だと答える。疑問を持ちながらも、二人は無料の牛乳を腹一杯に飲みこむ。しかしイスカンダリーとイーサーは間もなく猛烈な腹痛に襲われ、胃の中のものをすべて吐き出す。またもやスカトロジー表現

である。

二人の苦境に対して少年は、この牛乳鉢にはネズミが落ち込んで売り物にならないので喜捨（ザカート）として二人に進呈した、と事の真相を明らかにする。大人の知恵に勝る少年の機知に、知恵者二人はまんまと引っかかってしまったのである。

この「アルメリアのマカーマ」ではイスカンダリーの機知と大胆さが際立つ。それは少年に対して、なぜパンは有料なのに牛乳は只なのか、と問うことなしに飲み干した軽はずみな行動と対照的である。この対照の妙は、策略に引っかかったパン屋と牛乳屋とともに、利発な少年を記すことで一層際立つ。イスカンダリーの機知も少年の素直な一言を信じたばかりに崩れ去る。この大人と子供の対比、機知と無知の対比は自ずと笑いを誘う。

ミカが述べるように、「ミイラ取りがミイラになる」おかしみの源泉は役割の転倒にある。賢者が愚者にやり込められ、子供が大人を手玉に取る。この「モースルのマカーマ」がまさにこの定義にあてはまる。（ミカ、52；ベルクソン、66）

さらに前述のイーサーが主人公の「バグダードのマカーマ」（25話）と「牛酪（ナヒード）のマカーマ」（34話）も同様であり、イスカンダリーの弟子で、師に倣って悪事を働き、田舎ものを相手に食い逃げに成功したが、逆に子供や田舎者に誑かされ、空腹感を一層掻き立てられる。策士、策に溺れ、ミイラ取りがミイラになる。またイーサーの失敗談の場合、ベルグソンが説くように、同じテーマが繰り返されているのも、一層笑いを増幅させる。

さらに『マカーマート』には「劇的アイロニー」を感じさせる要素が含まれている。喜志が説くように、登場人物が知らないことを読者（観客）が知っていると、読者（聴衆）はストーリー（劇）の進行において、登場人物より優位に立ち、登場人物を距離をおいて見、自ずと事実（結末）を知らない登場人物に対し笑いと憐憫を催す。（喜志、35、44；ミカ、44）

『マカーマート』において、イーサーが旅先で邂逅し、興味を惹かれる人物は例外なく変装した悪漢イスカンダリーである。イーサーはどんなに失敗してもそこから教訓を学ぶことがない。読者（聴衆）はイーサーと変装の人物の邂逅場面を読む（聞く）毎に、イーサーの間抜けぶりに軽侮と憐憫と催す。そしてこの繰り返しはさらにその感情を拡大させる。（Goodman, 34）

さらにイスカンダリーの千変万化の変装振りも読者（聴衆）を驚かす。若者が老人に変装は可能だろうが、その逆は容易ではない。また、時には子連れ、あるいは夫婦同道、さらに理髪師や狂人をも装う。いかように変装しても、その真実をイーサーは見抜くことはできない。第24話「病院（マーリスターン）のマカーマ」ではイーサーは精神病院を訪れ、入院患者（狂人）に説教をされ、あまつさえその発言の真意を確かめるために、引き返して再度狂人の意見を求める。観客はイスカンダリーの伴狂ぶりとイーサーの間抜けさという2重のアイロニーを感じ取ることができる。

このイスカンダリーの変装と、論理の転倒というカーニバルに必須の要素は第33話「フルワンのマカーマ」においても展開されている。ハッジ（メッカ巡礼）を終えて、身を整えようと散髪屋に入ると、二人の理髪師が、この客の頭は自分のものと互いに言い張って喧嘩を始める。そして中に割って入った店主は、こんな詰まらない物（客の頭）で争うのは止めろと言う。

ハッジ帰りの神聖で、人の敬意を受けるべき身体を貶める発言程、論理や理性の欠如、転換を表すものはない。また、理髪店の店主に扮したイスカンダリーに、またしても気づかないイーサーの迂闊さ。このようにハマザーニーの『マカーマート』には二重のアイロニーが各話に込められている。

#### 4 カーニバル世界

さてハマザーニーはこの多様な笑いの要素を含む作品でいかなる世界を作り出しているのだろうか。主人公イスカンダリーは常に、自身の悪行を弁明して、自身は無慈悲な運命（ダブル）や時代（ザマーン）に翻弄されている者だと述べる。ジャーヒリーや期の寛大さと名誉をエトスとする時代はとっくに過ぎ去り、世は騎士道精神が失われて、商業倫理もないがしろにされている。弱者が強者を食い物にし、精神異常者が学者に説教を垂れる。また子供が大人をやりこめ、傷つける（マディーラ、バグダード）。つまりあらゆる価値観が逆転したカーニバル世界に一変してしまったことを描いている。

世には表（ザーヒル）と裏（バーティン）があることを示す。悪漢イスカンダリーも時には被害者となり、文人イーサーも悪事を働く。このような世界を描くことでハマザーニーは、「無慈悲な世界を知恵を働かせ、策を弄して生き延びろ」、「世には二面性があるので、甘言と見せかけに気をつけろ」、と読者（聴衆）に呼びかける。いわば社会批判と警世の書とも読みうる。（Wang, 83）

カーニバル世界では全てが可能で、かつ合理性を持ち、誇張と過度を特徴とし、これらが繰り返されることで笑い、あるいは批判が増幅される。（Wang, 69）『マカーマート』の全逸話（マカーマ）はハディースに倣う形式で始められ、華麗な文体で下賤な犯罪行為が描かれている。そしてこの文学形式、技法が執拗に繰り返される。聖なるテキストをパロディ化し、価値観を逆転させる。ハマザーニーの『マカーマート』はこの価値逆転の世界を描いて社会批判を行ったテキストである。読者、あるいは観客は、この社会批判が込められた作品を読み、あるいは観て、溜飲を下げるとともに（Schadenfreude, cf., Goodman）、この光景や人物は自分自身がおかれた世界であると気づいた時に自己憐憫に駆られる。しかし後続のハリリーはこの点を見逃し、あるいは誤読して、その批判の牙を失い、徒に文体に凝り、万学の士を主人公に据えてハマザーニー作品とは異なる作品を作り上げたのである。そこにハリリーのハマザーニーに対する「影響の不安」を指摘する研究者が多い。（岡崎—2005、222）

---

#### （使用テキスト）

al-Hamadhānī, Badī' al-Zamān, *al-Maqāmāt*, ed. M. 'Abduh, Beirut, n. d.

al-Ĥarīrī, *Maqāmāt al-Ĥarīrī*, ed. 'I. Sābā, Beirut, 1980.

Prendergast, W. J. (tr.), *The Maqāmāt of Badī' al-Zamān al-Hamadhānī*, 1915.

Chenerry, Thomas (tr.), *The Assemblies of Al Hariri, translated from the Arabic with an Introduction and Notes, historical and grammatical*, London, 1867.

堀内勝（訳）、『マカーマート 中世アラブの語り物』（東洋文庫）、平凡社、2009年。

同「〈原典翻訳〉アル・ハマザーニー著『マカーマート』」、『イスラーム世界研究』、5（2012年）、6（2013年）、7（2014年）。

（参考文献）

- Abu Haidar, Hareer, “*Maqāmāt* Literature and the Picaresque Novel,” *JAL*, V (1974).
- Beeston, A. F. L., “The Genesis of the *Maqāmāt* Genre,” *JAL*, 2 (1971).
- Bergson, Henri, *Le Rire*, Presses Universitaires de France, 1959. (増田訳『笑い』、光文社古典新訳文庫、2016年。
- Ching-Jen, Wang, “Bakhtin’s Spirit of Carnival in Hamadhānī’s *Maqāmāt*,” 『外国語文研究』、第十三期（2011）。
- Dentith, Simon, *Parody* (The New Critical Idiom), Routledge, London, 2000.
- Eco, Umberto, “Theory of Carnival,” in Th. A. Sebeok (ed.), *Carnival!*, Berlin, Mouton, 1984.
- Goodman, L. E., “Hamadhānī, Schadenfreude, and Salvation through Sin,” *JAL*, XIX (1988).
- Guilhamet, Leon, *Satire and the Transformation of Genre*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1987.
- Hāmeen-Antilla, Jakko, *Maqāma – A History of a Genre*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- Jankelevitch, Vladimir, *L’Ironie*, Flammarion, 1964. (久米訳『イロニーの精神』、筑摩書房、1997年)。
- Kilito, ‘Abdalfattah, *Les séances: recits et codes culturels chez Hamadhānī et Ḥārīrī*, Paris, Sindbad, 1983.
- Multi-Douglas, Fedwa, “*Maqāmāt* and *Adab*: al-*Maqāma al-Madiriyya* of al-Hamadhānī,” *Journal of American Oriental Society*, 105 (1985).
- Micue, D. C. *Irony* (Critical Thinking). (森田孟・訳『アイロニー』（文学批評ゼミナール13）、研究社、1973年。
- Monroe, James T., *The Art of Badī‘ az-Zamān al-Hamadhānī as Picaresque Narrative*, Beirut, American University of Beirut, 1983.
- Okazaki, Keiji, “*Maqāma* as a Courtroom Play – Disguised Hero, Duped Judge,” *Orient*, 42 (2007).
- Pollard, Arthur, *Satire* (The Critical Idiom), Methuen, 1973.
- Reihan, Joel, C., *Ancient Menippean Satire*, Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1993.
- Richards, D. S., “The *Maqāmāt* of al-Hamadhānī: general remarks and a consideration of the manuscript,” *JAL*, 22 (1991).
- Rodinson, M., “Le marchand musulman,” in D. S. Richard (ed.), *Islam and the Trade of Asia – A Colloquium*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1970.
- Wang, Ching-Jen, “Bakhtin’s Spirit of Carnival in Hamadhānī’s *Maqāmāt*,” 『外国語文研究』、第13期。(nccur.lib.nccu.edu.tw/bitstream/140.119/.../69-88.pdf.)
- Wendelin, Wenzel-Teuber, *Die Maqamen des Hamadhani als Spiegel der islamischen Gesellschaft des 4. Jahrhunderts der Hidschra*, Wurzburg, Ergon Verlag, 1994.
- Young, Douglas, C., *Rogues and Genres: Generic Transformation in the Spanish Picaresque and Arabic Maqāma*, Newark, Juan de la Cuesta, 2004.
- Zakhariya, Katia, *Abū Zayd al-Sarāḡī, imposteur et mystique: relire les Maqāmāt d’al-Ḥārīrī*, Damas, Institut Français d’Etudes Arabes de Damas, 2000.
- 内海彰「アイロニーとは何か？アイロニーの暗黙的提示理論」、『認知科学』、4巻4号（1997年）。
- 岡崎桂二「アダブの罫—『マカーマート』のエクリチュール」、『四天王寺国際仏教大学紀要』、34（2002）。
- 同「ジャンルの生成と変容—間テクスト性から見たる『マカーマート』」、『四天王寺国際仏教大学紀要』、40（2005年）。
- 同「マカーマート文学における論争ジャンル—『マカーマート』の周縁」、『四天王寺大学紀要』、48（2009）。
- 同「アダブ考—アラブ文化におけるアンソロジーの思想」、『四天王寺大学紀要』、51（2011）。

喜志哲雄『喜劇の手法』、集英社文庫、2006年。

北岡誠司『バフチン 対話とカーニヴァル』、講談社、1988年。

辻大介「アイロニーのコミュニケーション論—The Pragmatics of Verbal Irony」、『東京大学社会情報研究所 紀要』、55号（1997年）。